



相談電話(092)741-4343 24時間年中無休

## 「病にかかり感じたこと」

福岡いのちの電話副理事長

**濱生 正直**

(学校法人九州聖公学園理事長, 牧師)



2013年5月の連休に孫たちがやって来ました。2歳の孫がわたしの首を触りながら、何度も「じーじ、どうしてここにこぶがあるの」と尋ねます。3カ月前から気になっていました。痛くもかゆくもないので、そのままにしていたのです。連休が明け、近くの耳鼻咽喉科の病院に行きました。医師は首を触っただけで、「大きな病院に行って診てもらってください」と言われ、紹介状を持って、九州大学病院に行きました。すると、「中咽頭癌です」と診断されました。入院、検査が続き、主治医から治療方法の説明がありました。「『摘出手術』か『抗がん剤と放射線の治療』の方法がある、どちらを選択するか」と決断を迫られます。「摘出手術をすれば、完全に癌は摘出されるが、声が出なくなる恐れがある」と聞かされます。声を出す職業なので躊躇しました。最終的には、「抗がん剤と放射線の治療」、うまくいかないときは、「摘出手術」をするということになりました。厳しい治療だと聞いていましたが、大変なもので、体力が持たず、抗がん剤も放射線も途中で中断することになりました。特に、放射線では口の中が焼け、口と喉が火傷のようになり、物をのみ込むと激痛が走ります。のみ薬、注射、はり薬のモルヒネ併用で、精神的にまいってしまい幻覚を見るようになり、「せん妄」にかかりました。「死

ぬ」ということには、あまり恐れを感じていませんでした。しかし、「『死ぬ』ならば『家』で死にたい」という思いが異常に強かったようです。家に帰りた一心で病院中を徘徊し、何度も病院を脱出しようとしてしました。病院にとっては厄介者であったようです。

そんなわたしが「生きなければ」という思いになったのは、わたしが関係しています幼稚園の、子どもたちが書いてくれた手紙や折ってくれた千羽鶴でした。小さな手を合わせ、毎日お祈りしてくれている子どもたちのことを知らされると、「こんなわたしでも必要とされているのだ」と気づかされ、その子どもたちにちゃんと応えなければと思うようになります。そこから、「死んでもいい」という気持ちから、「生きていこう」という気持ちになったようです。

人は受け入れられ、必要とされていると感じるとき、生きる力が湧き出てくるようです。「いのちの電話」で多くの人が、「わたしは受け入れられていない」「必要とされていない」と訴えてきます。でも、少なくとも相談員は、「わたしはそうではない、あなたを受け入れていますよ」と言い続けていくのが「いのちの電話」のミッションではないかと思えます。

「福岡いのちの電話」は24時間年中無休ダイヤルです

**(092)741-4343**

毎月10日はフリーダイヤル「自殺予防いのちの電話」を実施

**0120-783-556**

メールによる「インターネット相談」は <http://www.inochinodenwa.org/soudan.php>